

セッションII 「表象文化史の中の『源氏物語』」

平安物語文学における「孝」の受容

——『源氏物語』を中心に——

張 龍 妹*

I. 『孝子伝』からみた「孝行」の分類

孝は「孝悌」といって家庭における基本的な徳目で、親に対してはその生存中に敬愛をもって仕え、亡くなってからは心を尽くして哀悼し、兄弟に対して従順に仕えることを言う。また、「忠孝」と並び称せられ、孝子でしかも忠臣であることが社会における士大夫の徳目として求められる。

中国では唐代を境に、『孝子伝』『孝経』の代わりに『二十四孝』が台頭し、宋代以降では、『二十四孝』が主導になった。日本では陽明本と船橋本『孝子伝』が存在していたため孝子説話の受容は室町時代まで『孝子伝』が流行し、それ以降ようやく『二十四孝』が受容されるようになったという¹。したがって、平安時代の孝子説話の受容を考えるには、まず『孝子伝』から始めなければならない。

現存陽明本と船橋本『孝子伝』はわずかの順序の違いがあるものの、採録された話は同じ45話である。孝行の内容によって以下のような9項目に分類することができる。○数字は陽明本の話の番号である。

1. 生存中に扶養する

- ①舜 ③刑渠 ④伯瑜 ⑤郭巨 ⑧三州 ⑪蔡順 ⑬老萊之 ⑭楊威 ⑮陳寔
⑳仲由 ㉓朱百年 ㉖孟仁 ㉗王祥 ㉘姜詩
㉚曾參 ㉛禽堅 ㉜慈烏

御伽草子にこの類の話が多いが、平安の物語に

描かれているのはほとんど上層貴族階級の話である。食べるものもなく、親の生存中に心を尽くして扶養する話は『うつほ物語』の仲忠が北山のうつほで母親を養う話ぐらいであろう。

2. 死後哀悼

- ②董永 ⑨丁蘭 ⑭宋勝之 ⑰曹娥 ⑲欧尚
㉑劉敬宜 ㉒高柴 ㉔張敷 ㉙叔先雄 ㉚顔烏
㉛許孜 ㉜曾參 ㉞羊公

これも中世にはよくみられる孝行説話であるが、平安では、親の死後の哀悼は、例えば『源氏物語』では、桐壺帝が崩御してからの追善供養が挙げられよう。

3. 敵討

- ⑦魏陽 ⑨丁蘭 ㉒魯義士 ㉗董黯 ㉘眉間尺
同じ後世にはみられる話型であるが、平安の物語には不似合いなものである。

4. 祖父に対する孝行

- ⑥原谷

母方の祖父に対する孝行という意味では仲忠の例があるが、しかしそれも養う意味において原谷の話と違う。

5. 兄弟への悌

- ⑩朱明 ⑫王巨尉 ㉒謝弘微 ㉓魯義士

仲忠が異母兄弟の面倒を見ることが、その例と見ることができる。

6. 節婦義娘

- ④東歸節女

これも後世にはみられる話であるが、平安の価値観とは異にする。

*北京外国語大学北京日文学研究センター教授

7. 継子孝行譚

- ①舜 → 継母を始め、父、同父異母の弟にも虐められるが孝を貫く。
- ②魯義士 → 義士義母
- ③関子騫 → 継母に虐待されながらも父親を諫め、継母を改心させた
- ④蔣詡 → 継母に孝行、何度も殺されそうになったが、とうとう継母が改心
- ⑤伯奇 → 継母に讒言され、自殺。死後復讐
- ⑧申生 → 継母に讒言されて自殺
- 継母から虐待を受けても父親に対し孝行を貫き(真相を明かさない⑤と⑧)、さらに継母にも孝行する話である。孝行の最たるものであるが、平安の物語にも『落窪』や『源氏』の中にその影響がみられると言われてきた。

8. 忠孝の間

- ⑩毛義 → 母が生存中にその扶養のために任官し、母が亡くなった後は辞官している。
- ⑨申明 → 父の言葉にしたがって軍隊を率いて戦争に出かけ、父が敵に囚われ殺されるが、それを乗り越えて戦争に勝つ。のちに帰郷して父親を葬り、三年礼を尽くして自殺した。
- ④李善 → 主家の幼児を養い、その忠誠が天を感動させ、乳が出るようになった。
- 忠孝の関係をいかに処理するのかには孝思想の根本があるように思われる。これは官人としての平安男性も抱えていた問題であろう。

9. 天子の孝

- ①舜 孝行のために堯から天下を譲られる。
- 孝行が天子としての最高徳目とされているが、現実はどうであるのか。冷泉帝の光源氏を実父として待遇しようとするのがその表れであろうか。「孝」にあたる和語もなく、完全に中国から輸入された理念であるが、以上の分類からもわかるように、平安の実生活とはかけ離れたものであるといわねばならないようである。以下は「7. 継母孝行譚」「8. 忠孝の間」「9. 天子の孝」というもっとも中国的と考えられる三点をめぐって、

平安物語における受容を分析してみたい。

II. 継子孝行譚

1. 中国における継子孝行譚の制度的意味

継子孝行譚は継子が継母に虐待されても猶孝行を続け、とうとう継母を改心させる話である。前節で挙げた六話のうち、⑤と⑧は継子虐め譚で、孝行の相手は実父であるため、ここでは除外する。実は『孝子伝』に収録されている⑦王祥²と③曾參³の話も継子孝行譚である。これらの継子孝行譚の特徴といえば、孝行し虐待されるのは嫡長子である。嫡長子が生みの母親を亡くし、新たに父親の配偶者になった継母に支子⁴が生まれる。継子虐めが発生する原因は、嫡長子と支子(庶子)との決定的な身分差にある。『儀礼・冠礼第二』によると、嫡長子の冠礼は「阼(祚)」という正殿の東の階段で行われ、父親の代わりを著わすためだとある⁵。そのかわり、庶子の冠礼はただ部屋の外の南で行われるとあるのみ⁶。要するに、父親の後継としての資格の有無が問題である。したがって、支子を生んだ継母が嫡長子を虐待するのはほかならぬ相続権のためである。

このように利害関係の極端に継母と嫡長子がいるようであるが、それでも継母に対する孝行が嫡長子に義務付けられる。それも『儀礼』ではこのように定められている。「喪服経伝」によると、継母は父の配偶者である故、生母と同様で、孝子は生みの母親と継母とを異にすることができないと、「齊衰」という3年間の服喪をしなければならない⁷。そのかわり、庶子が父親の後継者になった場合、その生母のためには3ヶ月の「緦麻」の服喪のみになる。さらに五位以上の士大夫になったら庶母のために服喪が必要でなくなる⁸。

『儀礼』は春秋(公元前770年-公元前476年) 戦国(公元前475年-公元前221年)時代に形成されたものであるが、元の時代になっても殆どそのまま踏襲されていた。至治2年(1322)以前元朝

法令の集大成である『元典章』における「継母」「庶母」の服喪期間は『儀礼』のとおりである。

したがって、継子による継母への孝行は中国の家父長制におけるもっとも感情を排除した、制度化された行為である。もっとも理不尽であり、孝行の最たるものであるといわねばならない。

2. 古代日本における親族関係の認識

『新撰字鏡』には、「継父 万々知々 庶兄 万々兄 嫡母 万々波々」(親族部十三)とある⁹。『倭名類聚抄』にも、「継父和名萬萬知知、継母萬萬波波」とある¹⁰。さらに、『令集解・喪葬』には、

嫡母 古記云、妾之男女、謂父嫡妻為嫡母。々々為妾子、無報服也。俗云麻々母也。

継父 古記云、母之後夫為継父。々々為妻之前夫男女、無報服也。俗云麻々父也。

異父兄弟姉妹 古記云、異父同母、故曰異父、既異姓、故服降身之兄弟姉妹一等、俗云麻麻波良加良也。

とある¹¹。『古事記』『日本書紀』における用例について先稿で検討した¹²。ここでは、補足的に『今昔物語集』の用例を見てみたい。天竺部卷二「微妙比丘尼語第三十一」であるが、「微妙比丘尼」の前世は一人の長者の「大婦」であったが、子がなかったため、長者が「後二小婦二娶テ、夫甚ダ愛念スル間ニ、一人ノ男子ヲ生」んだ¹³。その子を、彼女が頭に鉄の針をさして殺した。『今昔』では、その嫡母である「大婦」を「継母」としている。また本朝部卷三十「大和国人得人娘語第六」の話であるが、正妻と妾とに同時に女子が生まれた。正妻がなかなか優しい人で、庶出の娘をも自分が迎えて育てるようにした。

継母ノ心ハ風流也ケレバ、此ノ継子ヲ惡シトモ不思デ、我ガ子ニ不劣ズ思テ過ケルニ、此ノ向腹ノ乳母、心ヤ悪カリケム、此ノ継子ヲ憎マシク不安ズ挑思テ、……

嫡母を継母、庶娘を継子として、さらに庶娘の乳母が嫡女を継子としているところが注目される。生みの親ではない親子関係が「まま」親子関係である。

3. 平安物語にみえる「まま」親子関係

中国古代では生みの母「親母」を除いて「八母」といって、「嫡母」「庶母」「継母」「出母」「慈母」「養母」「嫁母」「乳母」と、「母」の立場にいる女性を細分化していた。平安物語と関係の深いのは、「嫡母」「庶母」「継母」「養母」であろう。なお、ここでいう「継母」は父親の後妻を指す。以下は試みにこの分け方に従って、平安物語における「まま」親子関係について考えてみる¹⁴。

○養母と嫡子女

花散里一夕霧

夕霧は光源氏の嫡長子にあたるが、その養育は本来継母(光源氏の後妻)に委ねられるはずであるが、光源氏は花散里に彼の面倒を頼んだ。中国では、庶出の子が生母を亡くしたときに、父親の命令で他の子どものいない庶母に養育を任されることはある。その場合、その庶母を慈母という。

○庶母と嫡子女

中将の君(浮舟の母)一大君・中君

庶母はその身分差によって嫡出の子女を虐待することができない。中将の君の場合は、自身がかえって居場所が無くなってしまおうという有様である。

○継母と継子女

① 忠こそ一父の右大臣橘千蔭再婚の相手
継子に恋する話型

② 紫の上一夕霧

③ 空蟬一軒端萩と紀伊守

④ 玉鬘一真木柱・太郎・次郎

⑤ 真木柱一紅梅大納言の娘たち

⑥ 中将の君(浮舟母)一常陸守の先妻の娘たち

①を除いて虐めが生じていない。この場合、嫡子

がすでに成人し、継母の子女と先妻の子女との間に年齢差が存在し、平安の継子虐め譚の典型——結婚における虐めは、発生しないのである。

○継父と継子女

- ① 光源氏—玉鬘
- ② 光源氏—秋好中宮
- ③ 紅梅大納言—真木柱の宮の御方
- ④ 按察大納言—雲居雁
- ⑤ 常陸守—浮舟

①と②は忠こそその話のパロディーと考えられよう。グリムのシンデレラ物語にもっとも近い例は③真木柱と紅梅大納言の娘の例であろう。真木柱は蛭兵部卿宮の御方を連れて紅梅大納言と再婚し、宮の御方は紅梅大納言の先妻の娘たちとともに結婚適齢期である。真木柱は実娘のために動くことなく、大納言の意向どおりに大君を東宮に入内させ、中君を匂宮と結婚させた。正反対の例は⑤浮舟とその継父常陸守である。浮舟と結婚相手争いになるのは常陸守の先妻の娘ではなく、同母異父の妹であるが、継父の働きによって浮舟の縁談が破綻してしまう。この2例で娘の結婚における父親の役割が窺える。『落窪物語』のように嫡妻が嫡出の娘のためにではなく、後妻が父親と血縁関係のない娘のために動くのはやはり無理であろう。④の按察大納言は雲居雁と同居していないので、虐めも発生していない。

○嫡母と庶出の子女

- ① 諸大夫御娘—住吉の姫君
- ② 中納言の北の方—落窪の姫君

この二列は『源氏物語』を先行する平安物語における「ままし」虐め譚の典型である。『源氏物語』には以下のような例が見出される。

- ① 弘徽殿大后—光源氏
- ② 兵部卿（式部卿）の北の方—紫の上
- ③ 四君（頭中将の北の方）—玉鬘
- ④ 兵部大輔の妻—大輔命婦（末摘花の巻）
- ⑤ 蜻蛉式部卿宮の北の方—蜻蛉式部卿の御娘（蜻蛉の巻）

- ⑥ 紫の上—明石の姫君
- ⑦ 落葉宮—六君
- ⑧ 四君（頭中将の北の方）—雲居雁
- ⑨ 承香殿女御—女三宮

①②は生母が亡くなり、嫡母から直接または間接に虐待を受けた例である。③の場合、四君は玉鬘を虐めたわけではないが、母親の夕顔がその苛めを受け、五条あたりに隠れ住むようになったから、間接的に苛めを受けたとも考えられるし、玉鬘自身も自分は住吉の姫君のような「ままし」譚の代表だと考えていた¹⁵。④と⑧は、娘の生母がともに実父と離縁し、再婚している。夕顔のような立場にいた女性たちであろう。2例とも父親の正妻と同居していなかったため、虐待も見られない。⑥と⑦であるが、紫の上と落葉宮はそれぞれ正妻格であり、明石姫君と六君の生母も健在で、それに作者は紫の上と落葉宮を実子のいない女性と設定し、①②の話とは逆の庶娘を愛しむ嫡母を造形している。⑤の場合であるが、作品では継母の具体的な情報はなく、新編全集の頭注では、後妻が先妻の娘たちを虐待するように解釈しているが、この「ままし」が「まま娘」を自分の兄と結婚させようとしているところは¹⁶、明らかに『落窪物語』の影響を受けており、嫡妻と庶出の娘の関係と解したほうが適切かと思われる。⑨では、東宮の母親承香殿女御は中宮ではないが、東宮の母で、皇太后になることは間違いのないから、嫡母格と考えられる。朱雀院が出家の準備をするにあたり、女三宮の後見を東宮とその母親承香殿女御に依頼するが、女御は女三宮の生母との関係がよろしくなかったから、心を込めて面倒を見ることもしなかった。

したがって、『源氏物語』の諸例において庶子女の虐待が生じていないのは嫡母と同居していない④⑧例か、嫡母に実子がいない⑥⑦例である。『住吉』、『落窪』をはじめ、平安の物語に描かれている「ままし」譚では虐め行為が「嫡母と庶出の子女」の関係に集中しているのである。

この虐めの原因を考えると、思い出されるのは若紫の失踪を聞き知ったときの兵部卿宮北の方の思惑である。

北の方も、母君を憎しと思ひきこえたまひける心もうせて、わが心にまかせつべう思しけるに違ひぬるは口惜しうおぼしける。

新編全集「若紫」①260頁

兵部卿宮北の方が若紫の「母君を憎しと思」う気持ちは、桐壺更衣を苛めた弘徽殿女御、夕顔に脅迫状を送った四君と共通しているに違いない。庶出の子女を虐めることは、まさにこのような正妻が庶妻に対する嫉妬の気持ちの延長線上にあるものである。

中国では、妻妾同居が前提で、正妻格の女性には他の子女をそれぞれに応じて養育する義務がある。たとえば、庶子が五位以上の官職についた場合、嫡母が封されるのである。嫡母がいない場合のみ、生みの庶母が封される¹⁷。嫡母が庶子を虐待するようなことが起きるのは、呂太后が戚夫人の子劉如意を殺害したように、その存在が嫡子の相続権を脅かすような場合である。

また、継子孝行譚からみると、『うつほ物語』の忠こそとその継母の関係が継子孝行譚の一類型といえよう。仲忠が「藏開下」巻で父親の他の妻（女三宮）を迎える場面「継母を宮迎へしたてまつりて」とあるが、ここの「継母」も生みの親ではないの意味として使われている。

このように日本古代では生みの親であるか否かによってのみ家族関係が認識されたと思われる。和語「まま」に「継」をあてることによって、「まま」親子関係ないし継子孝行譚の日本の特徴がかって見えなくなったしまったところがある。

Ⅲ. 忠孝と天子の孝

1. 忠と孝——君と親の軽重

『孝子伝』には ⑬「毛義」は母を養うためには理想を枉げて任官し、母が亡くなってから辞官しているという、君よりも親を大事にする話である。⑭「申明」は父の命令に従って君の為に出陣し、そのため父親が敵に殺されるはめになった。戦争に勝って、3年間の礼を尽くしてから自殺した。父親の死を招いてしまった出陣であったが、それも父親の命令に従ってのことであるし、のちに自殺までしている。孝行を第一に捉えている例であろう。⑮「李善」は主家の幼児を養い、その忠誠が天を感動させ、乳が出るようになったという忠節の話である。

それから、『古文孝経』の「開宗明義章第一」では、「身体髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、孝之終也。夫孝、始於事親、中於事君、終於立身。」とある。立身出世が「終孝」と捉えられているところが気になる。というのは古代において、「事君」以外に立身出世の道もなかったはずである。『説苑』第十九「修文篇」における齊宣王と田過の問答がまさにそのところを突いている。

齊宣王謂田過曰：「吾聞儒者喪親三年、喪君三年；君与父孰重？」田過対曰：「殆不如父重。」王憤然怒曰：「然則何為去親而事君？」田過対曰：「非君之土地無以処吾親、非君之禄無以養吾親、非君之爵位無以尊顯吾親；受之君、致之親、凡事君所以為親也。」

齊宣王の「君与父孰重？」という問に対し、田過は「殆不如父重。」と答えていながら、しかし、君の土地、君の禄、君の爵位でなければ、親を居住させ、養い、尊顕させることができないという。実は、これが「事君」を優先する大義名分になっているのである。

2. 俊蔭における忠と孝

この「終孝」の視点から『うつほ物語』の俊蔭の忠孝の問題を考えてみる。彼は基本的に親への孝行を理由に23年間もかかって琴を習得し、日本に帰るのである。まず阿修羅に向かって、「父母が手を別れし日より」、今日までのことを答える。阿修羅は、

「『日本の国に、忍辱の父母あり』と申すによりて、四十人の子どもの愛しく、千人の眷属の愛しきによりて、汝が命を許し給ふ。汝、すみやかにまかり帰て、阿修羅のために、大般若を書き、供養せよ。日の本の父母に向かふべき便りを与へむ」¹⁸

と言ひ、彼の命を助けたのみならず、琴を作るための木材を入手させた。ここで、阿修羅は「日の本の父母に向かふべき便りを与へむ」といっているように、琴および弾琴の技を習得することが親孝行になるのである。琴および弾琴がなぜ親孝行の便りになるのか。それは、この琴が一族繁栄の縁であるからにほかならない。要するに、一族の繁栄がまた親孝行となっている。一族の繁栄の抛り所を掴むために、俊蔭は敢えて「事親」レベルの孝行を放棄したのである。言い換えれば、親に事えその最後を見取ることができなかつたという不孝を代償に、一族繁栄の便りを入手したのである。

ようやく帰国の途につき、途中の波斯国でも親孝行を理由に帝の好意を押し切り、とうとう23年ぶりに帰国すると、「父隠れて三年、母隠れて五年」になっていた。それで三年の孝を尽したのち、宮仕えを続けた。結婚して娘も四歳になり、その娘に弾琴の技を伝授しようとしたときに、帝および朝廷の貴顕に持参した琴を配り、弾琴の技を披露した。この一連の行動は娘のために秘琴一族としての家柄の公表であろう。しかし、図らずも帝から東宮の琴の師を委任されることになってしま

う。そのときの俊蔭の辞退の言葉を見てみよう。

「歳いときなきほどに、父母を離れて、唐土へ渡されぬ。仇の風・大いなる波に漂はされて、知らぬ国に打ち寄せらる。深き悲しび、これに過ぎたるなし。からくして帰りもうで来たるに、父母滅びて、むなしき宿をのみ見る。昔、宣旨に適ひて、度々の試みを賜はりて、唐土に渡されぬ。父母あひ見ずして、長く別れて、悲しびはあまりありと言へども、学び仕うまつる勇はなし。みさいの罪にはあたるも、この琴は学び仕うまつらじ」と申して、まかり出でぬ。

いままではすべて天皇への忠に親への孝を犠牲にしていたように読める。しかし、親が既に亡くなっている現在、東宮の琴の師を辞退するのは、つじつまが合わない。ここで、親孝行が理由になっているのは、娘へ琴を伝授することが、天人が約束してくれた一族繁栄の一環で、それが「終孝」だからであろう。東宮に琴を教えるようになったら、その「便り」が無くなってしまう。

「楼の上下」で、仲忠が自身に賜る官職を辞退し、祖父の霊が宿る京極の地に叙爵を願って許される。わが血統をめめでたく皇統に組み入れることが予想できた段階で、このようなことが行われたことの意味するところ、一族の繁栄は俊蔭への孝行であり、またその不孝の罪を償うものである。

『うつほ物語』の作者として擬せられている源順には「五嘆吟并序」という作があり、第一首の末聯は「立名終孝深聞得、成業争為拜墓邊」とある¹⁹。男性官人には「立名」することが「終孝」であることが受容されていたと思われる。

3. 天子の孝——王位（天下）と親の軽重

① 中国の場合

『孝子伝』の第一話が「舜」であることから分かるように、孝行は天子としての聖徳である。『古文孝経』「天子章第二」には「愛敬盡於事親、然後徳教加於百姓、刑於四海。」とあり、天子の孝

行が四海の規範になることが強調されている。また『孟子・盡心章句上』二十節では、「孟子曰：君子有三樂、而王天下不與存焉。父母俱存、兄弟無敵、一樂也。仰不愧於天、俯不作於人、二樂也。得天下英才而教育之、三樂也。」と、「君子に三樂有り、而して天下に王たるは、与り存せず。」と主張する。さらに同二十五節では以下のような孟子と桃応の対話がみられる。

桃応問曰：「舜為天子、皐陶為士、瞽瞍殺人、則如之何？」孟子曰：「執之而已矣。」然則舜不禁與？」曰：「夫舜惡得而禁之？夫有所受之也。」然則舜如之何？」曰：「舜視棄天下、猶棄敝屣也。窃負而逃、遵海濱而処、終身欣然、樂而忘天下。」

舜の父親の瞽瞍が殺人をした場合、舜はどうすれば良いかという問に対し、孟子は「舜は天下を棄つるを視ること、猶敝屣を棄つるがごとくして、父親を背負って海辺に逃げると答える。儒教の正当の考えではあくまでも「天下」より「親」を大事に捉えているようである。

ところが、中国の歴史上、皇位をめぐる父子兄弟間の殺戮は繰り返されていた。『源氏物語』にも引用されている秦の始皇帝とその実父呂不韋を例にみてみよう。『史記・呂不韋列伝』にこのような話がある。

子楚、秦諸庶孽孫、質於諸侯、車乘進用不饒、居処困、不得意。呂不韋賈邯鄲、見而怜之、曰「此奇貨可居」。乃往見子楚、説曰：「吾能大子之門。」子楚笑曰：「且自大君之門、而乃大吾門！」呂不韋曰：「子不知也、吾門待子門而大。」

秦の安国君の庶子で人質として趙国にいた子楚は、不自由な生活をしていた。呂不韋がそのような彼を「奇物居くべし」と見込み、「吾れ能く子の門を大とす。」と接近する。もちろん、「吾が門は子

の門を待ちて大となるなり。」はその最終目的である。とうとう呂不韋の働きで子楚は安国君の後継者になった。また、うまい具合に子楚がすでに呂不韋の子を懐妊している舞姫を見染めた。その子が後の秦の始皇帝である²⁰。始皇帝の時代に、呂不韋は相国になり、「仲父」と号するほど栄華を極めたが、最後には自殺に追い込まれた。すでに帝位に登りつめた始皇帝にとって、呂不韋を抹消することが自身の正当性を確保することであり、また呂不韋の門を確実に大にしたことに間違いはない。これも一種の革命と考えてよいと思われる。前節で述べた「終孝」でいうと、帝位に登ることは孝行の極みとも考えられるのである。

一方、仏教側ではどうであろう。『涅槃経』巻十九「梵行品第八之五」が語るところの阿闍世王の話は『今昔物語集』巻三「阿闍世王殺父王語第二十七」にも取り上げられている。それによると、「劫初ヨリ以来、世二悪王有テ王位ヲ貪ルガ為ニ父ヲ殺ス事一万八千人也。」²¹とある。これがのちに『保元物語』において源義朝が父為義を殺害するときにも引用されている。そして、この父親を殺害する大逆罪を犯した阿闍世王であるが、「父ヲ殺セル阿闍世王、仏ヲ見奉テ三界ノ惑ヲ断ジテ初果ヲ得タリ。」と、仏を見る功德によって救済されているのである。

『敦煌變文集』に「唐太宗入冥記」と題する一篇がある。玄武門の変で殺害された李建成李元吉兄弟が冥府で唐太宗李世民を告訴したので、太宗の「生魂」が冥府に連れて行かれた。現世では輔陽縣尉の崔子玉がその審判役に当たっていた。彼はこの機会を利用して高位高官をなんとか手に入れようと企んでいた。それで、太宗を脅かし、「武徳七年になぜ兄弟を前殿で殺害し、慈父を後殿で幽閉したのか」²²と問い詰める。答えに窮した太宗に、崔子玉が「口卿蒲州刺史兼河北廿四州採訪使、官至御史大夫、賜口口（紫金）魚袋、仍賜蒲州縣庫錢二萬貫、與卿資家。」（三位相当の官職と莫大な金銭）を手に入れてから、「大聖滅族口口

(安国)。(李世民を大聖として讃え、その親不孝が国を安ずるためだ)という大義名分を教える。おかげで太宗は無事に生きて長安に戻ることができた。

このように、儒教では、天子の孝に関して、理屈としてはあくまでも親が大事であるにも拘らず、「終孝」「滅族安国」といった大義名分を用いることによって如何様にも解釈される。仏教においても然りである。

② 日本の場合

中国の話を念頭に置きながら、冷泉天皇の光源氏への孝の問題を考えてみる。しきりの天変地異の原因は冷泉帝が光源氏を親として待遇していないことにあると考えた夜居僧都は「仏天の告げあるによりて奏しはべるなり。よろづのこと、親の御世よりはじまるにこそはべるなれ。」と、帝の出生の秘密を明かす。それを知った冷泉天皇は「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりける」²³と後世での罪を心配し、光源氏への譲位をも考える。

これに関して中国の史籍に典拠を求める論もみられるが、それは明らかに不可能なことである。中国では、上述した呂不韋と始皇帝の関係のように、始皇帝自身の即位の正当性に関わるものであるから、呂不韋を抹消するしかないのである。それがまた結果的に呂不韋の目的を達したことになる。それとは別に、『扶桑略記』天慶4(941)年3月にみえる『道賢上人冥土記』の影響を指摘する論もある²⁴。

仏教的な罪の問題に関する議論であるが、冷泉帝の思考では、明らかに光源氏の桐壺帝に対する罪の問題が無視される代わりに、冷泉天皇がどのように光源氏を親として遇するかのみが問題にされている。これはおそらく仏教の因果で解釈できるであろう。冷泉帝の出生を宿世のしからしめるものと考えることである。また光源氏の血統を皇統に残す野心もなく、却って皇統を乱したことを一代で終えたことを幸いにしている。さらに、生

みの親であるかどうかで親族関係を認識していたから、養父であるはずの桐壺院への罪意識も見えない。要するに、冷泉帝のこの孝行心の現れは、以上のようなすべての外因を除外しての、儒教と仏教で求めるところのあるべき孝子の姿であると言える。

IV. むすび

以上は主に継子孝行譚と忠孝、天子の孝について中日の違いを見てきた。親族関係の認識の違いによって、「まま」親子関係が随分異なっている。ただ、それを「継子」譚とみた場合、中日の違いを見落としてしまう。忠孝の関係、又は天子の孝について、すでに源順の詩文や『うつほ物語』に「終孝」が受容されているが、『源氏物語』ではむしろ親子関係を単純に抽出した冷泉帝の孝行が描かれているように思われる。

注

- 1 徳田進『孝子説話集の研究』井上書房、近世編、1963年／黒田彰『孝子伝の研究』佛教大学通信教育学部出版、2001年など。なお、徳田進氏の研究によると、鎌倉時代までの孝子の話は『孝子伝』と『蒙求』から受容されている（『孝子説話の研究』井上書房 昭和38年p.21）。氏のまとめから見ると、受容された話のうち、『蒙求』にあって『孝子伝』にない話は「黄香温席」「王褒柏惨」の二話である。また『今昔物語集』震旦部に因果応報の話を除いて十七話の孝子説話が見出されるが、ともに『孝子伝』と一致する。
- 2 『晋書』卷三十三・列伝第三「王祥」について「早喪親、継母朱氏不慈、数讒之、由是失愛於父」とある。
- 3 『孔子家語』には「參後母遇之無恩、而供養不衰」とある。
- 4 嫡妻腹の嫡長子以外の男子、または庶子。『儀礼・喪服伝』「賈公彦疏『支子則第二已下庶子也、不言庶子云支子者、若言庶子、妾子之称。言謂妾子得後人、適妻第二已下子不得後人、是以変庶言支。支者取支条之義、不限妾子而言。』」とある。
- 5 「嫡子冠於衽以著代也」『和刻本儀礼経傳通解』第一輯、「冠禮第二」。

- 6 「若庶子則冠於房外南面」『和刻本儀礼経傳通解』第一輯、「冠禮第一」。
- 7 「繼母之配父与因母同。故孝子敢不殊也。」『和刻本儀礼経傳通解』第二輯。
- 8 「庶子承後為其母總也」「大夫以上為庶母無服」『和刻本儀礼経傳通解』第二輯。
- 9 天治本『新撰字鏡』卷二「親族部」。諸本同。臨川書店、昭和42年。
- 10 元和三年古活字版、卷二「親戚部」、勉誠社文庫、昭和53年。
- 11 国史大系24『令集解』pp.972~3。
- 12 拙稿「嫡母と繼母——日本の『まます』譚を考ふるために」『日本文学のなかの〈中国〉』アジア遊学197、勉誠出版、2016年。
- 13 『今昔』の引用は新日本古典文学大系による。以下同。
- 14 注12の拙稿を一部修正している。
- 15 「蛩」巻に「住吉の姫君のさし当たりけむをりはさるものにて、今は世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭がほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ。」とある。新編全集『源氏物語』③p.210。
- 16 「蜻蛉」巻に「この春亡せたまひぬる式部卿宮の御むすめを、繼母の北の方ことにあひ思はで、兄の馬頭にて人柄もことなることなき心かけたるを」とある。『源氏物語』⑥p.263。
- 17 欽定四庫全書『唐六典』卷二に「凡庶子有五品已上官封皆封嫡母無嫡母即封所生母」とある。
- 18 引用は室城秀之校注『うつほ物語』全、おうふう、による。
- 19 引用は『源順漢詩文集』佐藤信一・正道寺康子による。
- 20 『史記』卷八五「呂不韦列伝」には「呂不韦取邯鄲諸姬絶好善舞者与居，知有身。子楚从不韦饮，见而说之，因起为寿，请之。吕不韦怒，念业已破家为子楚，欲已掉奇，乃遂献其姬。姬自匿有身，至大期时生子政，子楚遂立姬为夫人。」とある。
- 21 引用は新日本古典文学大系『今昔物語集』による。
- 22 関連箇所の内容は以下のとおりである（●は異体字で、（ ）に正字を示す）。『崔子玉覓官心切，便索●（紙）祇●（揖）皇帝了，自出問□（頭）云：「問大唐天子太宗皇帝去武德七年，為甚□□（殺兄）弟於前殿，囚慈父於後宮？仰答！」崔子玉書□□與皇帝。（皇帝）把得問頭尋讀，悶悶不已，如杵中心，●（抛）□（問）頭在地，語子玉：「此問頭交朕爭答不得！」子玉見□□有憂，遂收問頭，執而奏曰：「陛下答不得，臣為陛下代答得無？」皇帝既聞其奏，大悅龍顏，「□（依）卿所奏。」崔子玉又奏云：「臣

為陛下答此問頭，必□陛下大開口。」帝曰：「與朕答問頭，又交朕大開口，何□？」子玉奏曰：「不是那個大開口，臣緣在生官卑，見（現）□（任）輔陽縣尉。乞陛下殿前賜臣一足之地，立死□幸。」皇帝語子玉：「卿要何官職？卿何不早道！」又□（問）：「是何處人事（氏）？」崔子玉奏曰：「臣是蒲州人事（氏）。」皇帝曰：「□卿蒲州刺史兼河北廿四州採訪使，官至御史大夫，賜□□（紫金）魚袋，仍賜蒲州縣庫錢二萬貫，與卿資家。」崔□□（子玉）奉口敕賜官，下廳拜舞，謝皇帝訖，上廳坐定。□（答）問頭次，報：「天苻（符）使下。」崔子玉問：「何來？」使啟判官：「判官往□□授蒲州刺史兼河北廿四州採訪使，官至御史大夫，賜紫□（金）□（魚）袋，仍賜輔陽縣正庫錢二萬貫。今日天苻崔子玉云。」□（皇）帝曰：「天苻早知，朕聞陰補陽授，蓋不虛矣。」崔子玉□□與皇帝答問頭，此時只用六字便答了。云：「大聖滅族□□。」『唐太宗入冥記』（『敦煌變文集』卷二 人民文学出版社、1957年）による。「武德七年」は九年の誤りであろう。

23 新全集『源氏物語』卷②pp.451~2

24 後藤祥子『源氏物語の史的空間』、東京大学出版会、1986年。